

第4章 移動と将来

白石壮一郎（弘前大学）

4-1. 問題意識と調査の意図

通常の地域移動調査、とくに公的統計調査では、過去の移動歴（実績）のみ扱われることが多い。本調査では、将来の移動（意識）についても設問した。この章では、将来の移動についての質問への回答の集計を手がかりに、「移動すること」にかかわる個人の意識がどのように規定されているのか、どの変数（現住地、ジェンダー、これまでの移動経験、出身地、業種、婚姻ステータス、移住先についての志向など）によって規定されてゆくのかを考察する。

4-2. 対象地域の概要

現おいらせ町（人口約25,000人）は、平成大合併で旧百石町・下田町が合併してできた自治体であり、農村部と一部の住宅開発地からなり、周辺市町村からも集客する巨大商業施設（イオンモール）を擁している。また、市街地をふくむ八戸市（人口約22.5万人）に隣接し、電車で10分（330円）で移動できる。八戸市には周辺市町村からの通勤・通学が多く、おいらせ町から他市町村への昼間人口流出の実数は八戸市が2,882人で最も多く、次いで三沢市の2,631人、第3位が十和田市の657人である²⁴。ちなみに八戸市からの昼間人口流出実数の第1位はおいらせ町の1,429人であり、八戸市とおいらせ町とは日常的なモビリティによる相互交流があると言えるだろう（おいらせ町を含む「八戸都市圏」）。

現むつ市（人口約75,000人）は、青森県下北郡でロードサイド店などを含む唯一の市街地が位置する。平成大合併のときに農漁村地域の旧大畑町・川内町・脇野沢村と旧むつ市が合併し、現むつ市となった（これらの旧3町村からむつ市街地までは、自動車なら1時間未満で到達できる）。前3町村は農漁業が主産業であり、合併後は旧むつ市の人口は横ばい状態だがこれら旧3町村は人口減少している。現むつ市は、近隣町村との昼間の人口流出入があり、実数の多い順に、流出先は東通村（751）、六ヶ所村（504）、横浜町（482）、流入元は東通村（846）、横浜町（214）、風間浦村（141）となっている。

なお、本調査回答者の自市町出身者割合は、むつ市が7割弱、おいらせ町が6割弱であった（表1）。おいらせ町・むつ市の単純比較が、どのような意味をもつかはその都度考察する必要がある。設問によってはむつ市／おいらせ町の内部を旧町村で分割するなどの操作で、市街地、新興住宅地、条件不利地などに分けて分析した方がよい項目もあるかもしれない。また、広島県内の2地域を対象におこなわれた轡田〔2017〕の調査研究は、「地方中枢拠点都市圏」（府中町）／「条件不利地」（三次市）という地域カテゴリを採用しているが、これをそのまま「地方中枢拠点都市圏」（おいらせ町）／「条件不利地」（むつ市）として適用できるのか。この点についても検討が必要だが、この章では触れていない。

²⁴ 昼間流出・流入人口データについては、青森県企画政策部統計分析課〔2016〕「平成27年国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等統計 青森県の従業地・通学地による人口・就業状態等集計結果の概要」を参照した。

表1 出身市町村

おいらせ			むつ		
市町村	人	%	市町村	人	%
札幌市	1	0.3	稚内市	1	0.3
帯広市	1	0.3	石狩市	1	0.3
八雲町	1	0.3	恵庭市	1	0.3
岩見沢市	1	0.3	旭川市	1	0.3
青森市	6	1.9	中標津町	1	0.3
旧名川町(現南部町)	1	0.3	札幌市	2	0.6
十和田市	11	3.4	網走市	1	0.3
野辺地町	2	0.6	新ひだか町	1	0.3
八戸市	32	10	函館市	2	0.6
むつ市	3	0.9	青森市	11	3.4
六戸町	3	0.9	鱒ヶ沢町	2	0.6
五所川原市	1	0.3	旧大畑町(現むつ市)	5	1.5
五戸町	4	1.3	大間町	2	0.6
東北町	2	0.6	風間浦村	3	0.9
旧下田町(現おいらせ町)	2	0.6	旧川内町(現むつ市)	1	0.3
階上町	2	0.6	旧倉石村(現五戸町)	1	0.3
三沢市	32	10	十和田市	3	0.9
平川市	2	0.6	野辺地町	2	0.6
六ヶ所村	2	0.6	八戸市	9	2.8
平内町	1	0.3	東通村	7	2.2
弘前市	1	0.3	むつ市	218	67.5
おいらせ町	184	57.5	横浜町	3	0.9
旧天間村林(現七戸町)	1	0.3	六戸町	1	0.3
三戸町	1	0.3	旧脇野沢村(現むつ市)	3	0.9
新郷村	1	0.3	平川市	1	0.3
宮古市	1	0.3	弘前市	4	1.2
岩泉町	1	0.3	深浦町	1	0.3
矢巾町	1	0.3	下北地方	1	0.3
仙台市	1	0.3	盛岡市	1	0.3
由利本荘市	1	0.3	滝沢市	1	0.3
南相馬市	1	0.3	紫波町	1	0.3
郡山市	1	0.3	一関市	1	0.3
高萩市	1	0.3	花巻市	1	0.3
河内町	1	0.3	気仙沼市	1	0.3
川口市	1	0.3	多賀城市	1	0.3
川崎市	1	0.3	仙台市	2	0.6
相模原市	1	0.3	鹿角市	1	0.3
富士市	1	0.3	にかほ市	1	0.3
伊東市	1	0.3	寒河江市	1	0.3
名古屋市	1	0.3	伊達市	1	0.3
豊橋市	1	0.3	本宮市	1	0.3
江南市	1	0.3	平田村	1	0.3
みよし市	1	0.3	会津坂下町	1	0.3
奈良市	1	0.3	下仁田町	1	0.3
行橋市	1	0.3	越谷市	2	0.6
八代市	1	0.3	朝霞市	1	0.3
宮崎市	1	0.3	寄居町	1	0.3
合計	320	100	我孫子市	1	0.3
			東金市	1	0.3
			府中市	1	0.3
			五泉市	1	0.3
			名古屋市	1	0.3
			舞鶴	1	0.3
			大阪市	1	0.3
			倉敷市	1	0.3
			真庭市	1	0.3
			飯塚市	1	0.3
			小郡市	1	0.3
			熊本市	1	0.3
			竹田市	1	0.3
			合計	323	100

4-3. 「地元」について

(1) 「地元」と感じられる地域の範囲 (F7.)

「地元」をどこ（どの範囲）と想定しているか、という意識について尋ねた設問である。回答者にとって「地元」と感じられる地域の範囲について、「出身の小学校区」「出身の中学校区」「出身の市町村全体」「他市町村を含む生活圏」「青森県全体」「その他（自由記述）」から1つを選択してもらっている。回答者680人中、662人からの回答を得ている（無回答18人）。

回答の分布をみると、むつ市在住者、おいらせ町在住者ともに「市町村全体」がもっとも高い割合だが、両者で比較すればむつ市在住者が高く（59.4%）、おいらせ町在住者は低い（43.5%）。しかし「小学校区」「中学校区」をあわせた値ではむつ市在住者、おいらせ町在住者どちらも23%前後で同じ程度である。

むつ市在住者とおいらせ町在住者とで度数分布に顕著な差がみられるのは「他市町村をふくむ生活圏」についてで、むつ市が10.0%であるのに対し、おいらせ町が22.9%と10ポイント以上の開きがある。つまり、おいらせ町在住者は、むつ市在住者よりも地元の地域範囲として他市町村を含めて考える人の割合が多い。これは先に2節で示しておいたそれぞれの地域概要からその背景が推察される。おいらせ町在住の場合は、隣接の八戸市や三沢市との通勤・通学などでの日常的な往来のある人口の割合が両市合わせて約22%を占め、これは先のおいらせ町在住者の地元と意識する範囲が「他市町村をふくむ生活圏」と回答した人の割合とほぼ等しい。

「地元」が通常は「出身地」と重ねて想定されることを考えれば、高校生までの生活移動圏で「地元」の範囲に関する意識が規定されうると考えてもよいだろう。だとすれば、町内に高校（普通科、進路多様校）が1校のみのおいらせ町出身者が、隣接する八戸市を生活移動圏内に入れており、かれらの「他市町村をふくむ生活圏」回答率が、市内に3高校があるむつ市出身者よりも高くなるということは考えられる。ただ、表2のデータはおいらせ町とむつ市の在住者の回答なのであり、たとえば弘前市出身でおいらせ町在住の回答者であれば、弘前市およびその周囲の他市町村をふくむ範囲について「地元だと感じるか否か」について回答していることになる。だから、出身地と高校通学までで「地元」の範囲に関する意識があるていど規定されるという仮説を確かめるためには、おいらせ町出身者、むつ市出身者を割り出した上で確かめる必要がある。

表2「地元」と感じられる地域の範囲

	むつ		おいらせ	
	人	%	人	%
出身の小学校区	26	7.6	32	9.4
出身の中学校区	50	14.7	48	14.1
出身の市町村全体	202	59.4	148	43.5
他市町村を含む生活圏	34	10.0	78	22.9
青森県全体	16	4.7	23	6.8
その他	3	0.9	2	0.6
無回答	9	2.6	9	2.6
合計	340	100.0	340	100.0

(2) 出身都道府県 (F8A.)

県内出身者が、むつ市（85.5%）、おいらせ町（91.4%）のどちらの回答者にも、第1位の割合を占めている（むつ市は「下北地方」という回答を「青森県内」に入れればわずかに値が増える）。第2位が北海道であることも共通しているが、県内出身者の割合との開きは大きく、むつ市在住者の3.4%、おいらせ町在住者の1.5%である。

北海道・東北地方のほかの出身者をみても、むつ市在住者の出身都道府県は12、おいらせ町在住者の出身県は9であり、むつ市在住者のほうが出身地のやや多いことがわかる。この差は、むつ市にある海上自衛隊に各地から隊員が転入してくることの影響が考えられるだろう。

(3) 出身市町村 (F8B.)

おいらせ町在住者、むつ市在住者いずれの出身市町村も、自市町がほかの市町村を引き離して1位であることは共通している。自市町内出身者の割合は、おいらせ町在住者が57.5%、むつ市在住者が67.5%であり、むつ市在住者が10ポイントおいらせ町在住者を上回っている。おいらせ町在住者の出身市町村の第2位は八戸市・三沢市で同率の10%であり、むつ市在住者の出身市町村第2位は青森市で3.4%

と、自市とのポイントの開きが大きい。

(4) 出身中学校 (F8C.)

回答者の卒業した中学校名を記述回答で尋ねた。表3はその単純集計である。この設問は、回答者の出身地を市町村より小さな範囲（中学校区）で特定するためのものである。別章で、出身地からの移住歴などの変数に利用している。

例えば、出身地の市町村（表1）は、平成合併後の現市町村だが、もしおいらせ町内とむつ市内でより意味のある地区区分（例えば市町内の「市街地」「条件不利地」「新興住宅地」「農村部」など）を適用するのなら、この中学校区を用いて「旧市町村単位」で区切っていくなどの方法が考えられる

(e. g. むつ市→「旧むつ市」「それ以外の旧大畑町ほか」)。

表3 出身中学校

おいらせ			むつ			むつ			むつ		
中学校名	人	%	中学校名	人	%	中学校名	人	%	中学校名	人	%
美香保	1	0.3	名久井第一	1	0.3	稚内東	1	0.3	大畑	28	9.1
名寄東	1	0.3	階上	2	0.6	北都	1	0.3	角達	1	0.3
沖館	1	0.3	堀口	8	2.6	中標津	1	0.3	川内	7	2.3
造道	1	0.3	三沢第五	6	1.9	東海第四	2	0.6	横浜	2	0.6
青森西	2	0.6	三沢第三	3	1	網走第三	1	0.3	有畑	1	0.3
甲田	1	0.3	三沢第一	9	2.9	静内第三	1	0.3	七百	1	0.3
三内	1	0.3	三沢第二	5	1.6	尾札部	1	0.3	倉石	1	0.3
十和田	3	1	平賀西	1	0.3	旭	1	0.3	平賀西	1	0.3
十和田東	2	0.6	平賀東	1	0.3	戸山	1	0.3	弘前市立第一	1	0.3
三本木高校附属	1	0.3	六ヶ所第二	1	0.3	佃	1	0.3	弘前市立第四	1	0.3
十和田第一	1	0.3	平沼	1	0.3	青森南	1	0.3	弘前市立第三	1	0.3
大深内	1	0.3	西平内	1	0.3	筒井	1	0.3	岩崎	1	0.3
甲東	1	0.3	木ノ下	35	11.2	沖館	1	0.3	見前	1	0.3
三本木	2	0.6	下田	152	48.7	新城	2	0.6	盛岡北陵	1	0.3
野辺地	1	0.3	三戸	1	0.3	波打	1	0.3	紫波第二	1	0.3
八戸市内の高校	1	0.3	新郷	1	0.3	鯉ヶ沢第一	1	0.3	大東	1	0.3
八戸北稜	5	1.6	榎林	1	0.3	鯉ヶ沢第二	1	0.3	宮古河南	1	0.3
根城	2	0.6	宮古河南	1	0.3	大間	3	1	上杉山	1	0.3
八戸第三	2	0.6	矢巾	1	0.3	奥戸	1	0.3	宮城野	1	0.3
市川	5	1.6	上杉山	1	0.3	木造	4	1.3	花輪第一	1	0.3
下長	4	1.3	東由利	1	0.3	柏	1	0.3	仁賀保	1	0.3
大館	1	0.3	原町第二	1	0.3	十和田東	1	0.3	陵南	1	0.3
江陽	1	0.3	秋山	1	0.3	野辺地	2	0.6	梁川	1	0.3
長者	1	0.3	河内	1	0.3	八戸北稜	2	0.6	本宮第一	1	0.3
八戸第一養護	1	0.3	戸塚西	1	0.3	福地	1	0.3	小平	1	0.3
南浜	2	0.6	中野	1	0.3	白銀	1	0.3	坂下第一	1	0.3
八戸第一	1	0.3	門野	1	0.3	根城	1	0.3	下仁田	1	0.3
三条	1	0.3	羽田	1	0.3	八戸第三	1	0.3	北陽	1	0.3
八戸高等学校小学部-中学校	1	0.3	宮田	1	0.3	市川	1	0.3	朝霞第四	1	0.3
白銀南	1	0.3	三好丘	2	0.6	是川	1	0.3	男衾	1	0.3
八戸東	1	0.3	奈良興東	1	0.3	東通村内の中学校	1	0.3	東金東	1	0.3
八戸第二	2	0.6	中京	1	0.3	北部	5	1.6	府中第二	2	0.6
是川	1	0.3	生目台	1	0.3	南部	3	1	五泉北	1	0.3
田名部	1	0.3	合計	312	100	東通	1	0.3	神丘	1	0.3
大畑	1	0.3						脇野沢	7	2.3	
川内	1	0.3						むつ	33	10.7	
六戸	3	1						田名部	82	26.6	
五所川原第三	1	0.3						近川	5	1.6	
倉石	2	0.6						大平	34	11	
川内	1	0.3						関根	6	1.9	
東北	2	0.6						むつ養護学校中学部	1	0.3	
上郷	1	0.3						大湊	15	4.9	
								合計	308	100	

(5) 出身高校 (F8D.)

回答者の卒業した高校名を記述回答で尋ねた。表4はおいらせ町在住者、むつ市在住者それぞれの単純集計を示したものである。有効回答は297票（おいらせ）、300票（むつ）だった。出身地と同じく、県内高校の卒業生（網がけ部分）が大部分を占め、おいらせ町在住回答者のうちで合計93.3%、むつ市在住の回答者のうちで合計85.4%が県内高校の卒業生である。

これらの出身高校は、例えば職業高校が普通科高校か、普通科高校のなかでも大学進学者の割合の高い高偏差値の進学校か、そうではない低偏差値の進路多様校かによって、卒業後の進路や就職後のキャリアパスがちがってくるだろう。ここでは目安として、卒業生の半数以上が四年制大学に進学する高校を「進学校」とし、半数未満が四年制大学に進学する高校を「非進学校・進路多様校」とした。進路先の具体的な情報が公開されていない場合には、偏差値50以上の普通科高校を「進学校」とした。

表4 出身高校

おいらせ

高校名	人	%
札幌東陵	1	0.3
青森県内の高校	1	0.3
青森	1	0.3
青森中央	1	0.3
青森東	2	0.7
青森北	1	0.3
青森工業	1	0.3
青森山田	1	0.3
北斗(定時制・通信制)	2	0.7
十和田工業	14	4.7
三本木	9	3.0
三本木農業	13	4.4
野辺地	3	1.0
八戸	8	2.7
八戸東	7	2.4
八戸西	8	2.7
八戸南	2	0.7
八戸北	4	1.3
八戸商業	6	2.0
八戸工業	6	2.0
八戸学院光星	13	4.4
八戸工業大学第一	9	3.0
八戸工業大学第二	5	1.7
八戸高専	1	0.3
八戸聖ウルスラ	3	1.0
八戸第一養護	1	0.3
千葉学園	4	1.3
向陵	1	0.3
八戸北高校南郷校舎	1	0.3
八戸中央	1	0.3
大湊	1	0.3
田名部	2	0.7
六戸	14	4.7
五所川原工業	2	0.7
五所川原第一	1	0.3
五戸	2	0.7
名久井農業	1	0.3
三沢(普通科・定時制)	37	12.5
三沢商業	30	10.1
柏木農業	1	0.3
弘前中央	1	0.3
東奥義塾	1	0.3
百石	53	17.8
三戸	2	0.7
黒石	1	0.3
七戸高校八甲田校舎	1	0.3
盛岡南	1	0.3
<small>盛岡南女子校高等部普通科・専攻科</small>	1	0.3
宮古工業	1	0.3
明成	1	0.3
西目	1	0.3
原町	1	0.3
東洋大附牛久	1	0.3
春日部女子	1	0.3
<small>科学技術学園(普通科・通信制)</small>	1	0.3
橋本	1	0.3
伊東	1	0.3
江南	1	0.3
岡崎	1	0.3
榛原	1	0.3
蒔田工業	1	0.3
日向学院	1	0.3
オレワ	1	0.3
合計	297	100.0

むつ

高校名	人	%
稚内商工	1	0.3
旭川東栄	1	0.3
中標津	1	0.3
北海学園	1	0.3
札幌商業	1	0.3
網走南ヶ丘	1	0.3
南茅部	1	0.3
小樽水産	1	0.3
北広島	1	0.3
北海道栄	1	0.3
青森	2	0.7
青森東	7	2.3
青森西	1	0.3
青森北	2	0.7
戸山	3	1.0
青森山田	3	1.0
東奥学園	2	0.7
青森第一高等養護	1	0.3
北斗(定時制・通信制)	5	1.7
鱒ヶ沢	2	0.7
大間	5	1.7
三本木	1	0.3
野辺地	4	1.3
光星学院野辺地西	10	3.3
八戸	1	0.3
八戸東	1	0.3
八戸南	1	0.3
八戸北	3	1.0
八戸商業	1	0.3
八戸学院光星	2	0.7
八戸工業大学第一	3	1.0
八戸聖ウルスラ	1	0.3
向陵	1	0.3
むつ市内の高校	1	0.3
大湊	53	17.7
田名部	60	20.0
むつ工業	40	13.3
むつ養護	1	0.3
田名部高校大畑校舎	18	6.0
大湊高校川内校舎	9	3.0
野辺地高校横浜分校	2	0.7
五所川原	1	0.3
五所川原第一	1	0.3
三沢商業	1	0.3
弘前	3	1.0
聖愛	1	0.3
百石	2	0.7
黒石	2	0.7
盛岡市立	1	0.3
盛岡南	1	0.3
紫波総合	1	0.3
大東	1	0.3
気仙沼向洋	1	0.3
仙台育英	1	0.3
仙台東	1	0.3
花輪	1	0.3
由利工業	1	0.3
寒河江	1	0.3
福島県内の高校	1	0.3
福島南	1	0.3
日本大学東北	1	0.3
坂下	1	0.3
吉井	1	0.3
越谷南	1	0.3
新座総合技術	1	0.3
坂戸西	1	0.3
印旛	1	0.3
成東	1	0.3
府中東	1	0.3
新津南	1	0.3
享栄	1	0.3
東淀川	1	0.3
岡山城東	1	0.3
関西	1	0.3
武田	2	0.7
嘉穂	1	0.3
熊本北	1	0.3
竹田	1	0.3
JFK	1	0.3
NHK学園	1	0.3
合計	300	100.0

移動の問題と関連づけて考えるため、おいらせ町とむつ市の高校進学に関する環境をみてみよう。おいらせ町内にある高校は、県立の百石高校1校のみである。百石高校は普通科と食物調理科とが併設されており、偏差値は41～43の進路多様校である（2016年の進路実績は卒業生男女計138名中、四年制大学進学15名）。一方のむつ市は、市内に田名部高校、大湊高校、むつ工業高校と3校の県立高校がある。田名部高校（偏差値50～53）は、むつ市中心市街近くに位置する普通科進学校である（定時制・英語科も併設）。2016年の進路実績は卒業生男女計165名で、四年制大学合格が174件、就職内定が22件だった。大湊高校（偏差値44）は、普通科の進路多様校であり、2016年の進路実績は卒業生男女計194名中、四年制大学進学62名。むつ工業高校は職業高校（偏差値41）であり、卒業生の大部分が高卒就職する（進路実績数の公開情報なし）。

表5-1と表5-2は、おいらせ町出身でおいらせ町在住の回答者（以下「おいらせ町出身者」）とむつ市出身でむつ市在住の回答者（以下「むつ市出身者」）の高校種別の進学先の分布を示している。双方でもっとも高い割合を示している進学先種別は、普通科の非進学校（進路多様校）である。普通科進学校への進学については、むつ市出身者（30.7%）がおいらせ出身者（14.1%）より高く、職業高校進学ではおいらせ出身者30.6%、むつ市出身者18.8%と、普通科進学校進学とほぼ同じポイント差での逆転した傾向がみられる。

表5-1 高校種別進学先(おいらせ出身者) 表5-2 高校種別進学先(むつ出身者)

高校種別	人数	%
普通(進)	24	14.1
普通(非進)	91	53.5
職業	52	30.6
特別支援	2	1.2
留学	1	0.6
合計	170	100.0

高校種別	人数	%
普通(進)	62	30.7
普通(非進)	97	48.0
職業	38	18.8
特別支援	2	1.0
留学	1	0.5
その他	2	1.0
合計	202	100.0

最終学歴を尋ねた別の設問（F19）の回答集計から、表5-3および表5-4を作成した。大卒・大学院卒あるいは在学中の割合をみると、おいらせ町在住者の30.2%、むつ市在住者の32.4%と、最終学歴にはそれほど大きな差はないことが分かる。「短大卒・高専卒または在学中」についても差はほぼない（双方4割前後）。「専門学校卒または在学中」については、おいらせ町在住者（59.0%）がむつ市在住者（54.8%）をやや上回るという結果になっている。

高校進学時に、自分のそれまで育った市町村を越境して進学する者はどのくらいいるのか。表5-5と表5-6はそれぞれ、おいらせ町出身者とむつ市出身者の具体的な進学先高校を示している。それぞれ、すでに確認したように自市町外の進学は目立っているが、両者を比較すれば、おいらせ町出身者が町内の高校に進学した割合（24.7%）が、むつ市出身者が市内の高校に進学した割合（80.2%）よりもずっと低い。

表5-3. 最終学歴:おいらせ在住者

	人	%	累積%
大学卒・大学院卒または在学中	85	25.4	30.2
短大卒・高専卒または在学中	35	10.5	40.7
専門学校卒または在学中	61	18.3	59.0
高卒	139	41.6	95.8
中卒	11	3.3	99.1
その他	3	0.9	100.0
合計	334	100.0	

表5-4. 最終学歴:むつ在住者

	人	%	累積%
大学卒・大学院卒または在学中	93	27.6	32.4
短大卒・高専卒または在学中	22	6.5	38.9
専門学校卒または在学中	54	16.0	54.8
高卒	156	46.3	96.4
中卒	11	3.3	99.7
その他	1	0.3	100.0
合計	337	100.0	

おいらせ町出身者は、隣接する三沢市と八戸市所在の高校に多く進学し、割合にすればちょうど全進学者数のおよそ4分の1ずつがこの2市の高校に進学しているのが分かる。普通科進学校は町内になく、八戸市に複数、十和田市に1校所在しており、大学進学希望者の多くがこれら2市の高校に進学するだろう。大学進学志望を必ずしも持たない者は、進学先として普通科進路多様校や職業高校に進学することになり、町内の百石高校、八戸市、十和田市、六戸市、五所川原市などに進学先がある。

表5-5

所在地(%)	高校種別	公立/私立	高校名	人数	%
おいらせ町(24.7)	普通(非進)	県立	百石(普通科・食物調理科)	42	24.7
	普通(非進)	県立	三沢(普通科・定時制)	28	16.5
三沢市(28.2)	職業	県立	三沢商業	20	11.8
	普通(非進)	私立	八戸学院光星	8	4.7
	普通(進)	県立	八戸西(普通科・スポーツ科)	6	3.5
	普通(進)	県立	八戸	5	2.9
	普通(進)	県立	八戸東	5	2.9
	普通(進)	県立	八戸北	3	1.8
	普通(進)	私立	八戸聖ウルスラ(普通科・音楽科・英語科)	3	1.8
八戸市(25.3)	普通(非進)	私立	向陵	1	0.6
	職業	私立	八戸工業大学第一(普通科・工業科)	5	2.9
	職業	私立	八戸工業大学第二(美術科)	3	1.8
	職業	県立	八戸商業	2	1.2
	職業	県立	八戸工業	1	0.6
	特別支援	県立	八戸第一養護	1	0.6
	職業	県立	三本木農業	10	5.9
	職業	県立	十和田工業	9	5.3
	普通(進)	県立	三本木	2	1.2
	普通(非進)	県立	六戸	10	5.9
五所川原市(1.2)	職業	県立	五所川原工業	2	1.2
県外(1.2)	特別支援	岩手県立	盛岡視覚支援学校高等部普通科-専攻科	1	0.6
	-	ニュージーランド	オレワ	1	0.6
その他(1.2)	普通(非進)	県立	北斗(定時制・通信制)	1	0.6
	普通(非進)	県立	八戸中央(定時制・通信制)	1	0.6
合計				170	100.0

表5-6

所在地(%)	高校種別	公立/私立	高校名	人数	%
むつ市(80.2)	普通(進)	県立	田名部	54	26.7
	普通(非進)	県立	大湊	51	25.2
	普通(非進)	県立	田名部高校大畑校舎	14	6.9
	普通(非進)	県立	大湊高校川内校舎	7	3.5
	職業	県立	むつ工業	34	16.8
	特別支援	県立	むつ養護 (高校名不明)	1	0.5
野辺地町(6.4)	普通(非進)	私立	光星学院野辺地西(総合学科)	10	5.0
	普通(非進)	県立	野辺地	3	1.5
	普通(進)	県立	青森東	3	1.5
	普通(進)	県立	青森	2	1.0
青森市(5.9)	普通(非進)	私立	青森山田(普通科・情報処理科・自動車科・調理科)	2	1.0
	普通(非進)	私立	東興学園(普通科・調理科・福祉科・情報科学科)	2	1.0
	普通(進)	県立	青森北	1	0.5
	普通	県立	戸山	1	0.5
	特別支援	県立	青森第一高等養護	1	0.5
	職業	私立	八戸工業大学第一(普通科・工業科)	3	1.5
八戸市(3.0)	普通(非進)	私立	向陵	1	0.5
	普通(非進)	私立	八戸学院光星(普通科・保育福祉科)	1	0.5
	職業	県立	八戸商業	1	0.5
おいらせ町(1.0)	普通(非進)	県立	百石(普通科・食物調理科)	2	1.0
横浜町	普通(非進)	県立	野辺地高校横浜分校	1	0.5
弘前市(0.5)	普通(進)	県立	弘前	1	0.5
県外(0.5)	-	アメリカ	JFK	1	0.5
その他(2.0)	普通(非進)	県立	北斗(定時制・通信制)	3	1.5
	-	-	NHK学園	1	0.5
合計				202	100.0

むつ市出身者の高校進学先は、自市内高校への進学がもっとも高い割合(80.2%)を示す。前述の通り、自市内でも普通科進学校、普通科進路多様校、職業高校とバリエーションがある。

4-4. 引っ越し予想

これ以降の「引っ越し予想」の設問は、移動の理由やタイミングはどのようなものと想定されているか、移動先はどこだと想定されるかなどを割り出すためのものである。これらを、おいらせ町在住者/むつ市在住者、業種、男女、学歴などによる差がどのように出るかについてクロス集計をみていく。

また「引っ越し予想」を、これまでの移動パターン(居住歴)と合わせてみれば、より複雑な移動パターンがどのように決まってくるのかが見えてくるはずだ(例えば、居住歴でUターンに分類された人は、これからも転出は想定していないのか、など)。

対象者の年代を考えれば、労働人口が多く含まれると想定されるが、一定割合の専業主婦もいることが考えられるので、前述のように男女別の集計をみていく必要がある。女性の場合は、配偶者や恋人の移動から予想している場合が考えられる(ジェンダー・トラック)。

(1) 今後引っ越しを考えているか(F12_1.)

今後引っ越しすることが考えられるかどうか、「(考えられるとすれば)おそらく■年後」「これからの引っ越しは考えにくい」の二者択一で回答してもらった。今後の引っ越しが考えられる場合、その要因としては就職、転勤、転職、結婚などが考えられるだろう。

表6 今後引っ越しを考えているか

	おいらせ在住者		むつ在住者	
	人	%	人	%
今後、引っ越すだろう	128	39.6	146	45.6
今後の引っ越しは考えにくい	195	60.4	174	54.4
合計	323	100.0	320	100.0

まず単純集計(表6)だが、おいらせ町在住者は「今後引っ越すだろう」を回答した割合と「今後の引っ越しは考えにくい」を回答した割合がおおよそ4:6になっている。むつはこれがおおよそ4.5:5.5の割合になっている(これは、むつ市の対象者に海上自衛隊員が含まれることの影響が考えられ

る)。

引っ越し予想と最終学歴との関係はどうだろうか。表7-1.、表7-2. はこの設問F12_1への回答と、最終学歴を尋ねた設問F19. の回答とのクロス集計表である。各学歴カテゴリの有効回答の全数のうち、引っ越しを予測している人の割合を、 $a/(a+b)$ として算出すれば、この値が高くなるのはおいらせ町在住者、むつ市在住者ともに、「大学卒・大学院卒または在学中」の高学歴者である。中卒・高卒・専門学校卒はこれよりも相対的に低い値を示しているが、「短大卒・専門学校卒」のカテゴリではおいらせ町在住者よりもむつ市在住者のほうがやや高い値を示している。

	a 引っ越す	b 考えにくい	合計	$a/(a+b)$
大学卒・大学院卒または在学中	46	36	82	0.6
短大卒・高専卒または在学中	11	23	34	0.3
専門学校卒または在学中	25	32	57	0.4
高卒	40	92	132	0.3
中卒	4	7	11	0.4
その他	1	1	2	0.5
合計	127	191	318	

	a 引っ越す	b 考えにくい	合計	$a/(a+b)$
大学卒・大学院卒または在学中	51	38	89	0.6
短大卒・高専卒または在学中	10	12	22	0.5
専門学校卒または在学中	17	34	51	0.3
高卒	64	81	145	0.4
中卒	4	7	11	0.4
合計	146	172	318	

次に、引っ越し予想と業種との関係はどうだろうか。別の「あなたの主な仕事の勤務先の業種または業務内容」について17業種からの択一式で回答してもらった設問F22. の結果と、F12_1. の今後の引っ越しを考えられるかどうかについての回答のクロス集計が表7-3. および表7-4. である。17業種あることによってそれぞれの業種の度数が小さくなってしまったため、有為差の検定はおこなっていないが、おいらせ町在住者は $a/(a+b)$ の値が0.7以上を示す業種が「不動産・金品売買」しかないのに比べ、むつ市在住者は「電気・ガス・熱供給・水道」「金融・保険」など全6業種が0.7以上の値を示している。ここからは、おいらせ町在住者よりもむつ市在住者の方がより将来の引っ越しを予想しているという傾向が出るのは、海上自衛隊員（業種別回答は「その他のサービス」あるいは「上記に分類されない公務員」を選択したと思われる）の影響のみではないことが推測できる。

表7-3. 引っ越し予想と業種:おいらせ

業種	a 引っ越す	b 考えにくい	(人)	a/(a+b)
農林漁業・鉱業	3	8	11	0.3
建設業	5	18	23	0.2
製造業	10	24	34	0.3
電気・ガス・熱供給・水道	0	5	5	0.0
情報通信	1	1	2	0.5
運輸・郵便	4	4	8	0.5
卸売・小売	16	19	35	0.5
金融・保険	1	4	5	0.2
不動産・金品売買	4	2	6	0.7
飲食店・宿泊サービス	5	10	15	0.3
生活関連サービス	5	8	13	0.4
専門技術サービス	1	2	3	0.3
その他のサービス	4	5	9	0.4
教育・学習支援	12	10	22	0.5
医療・福祉	24	35	59	0.4
上記に分類されない公務員	12	13	25	0.5
その他	6	5	11	0.5
合計	113	173	286	

表7-4. 引っ越し予想と業種:むつ

業種	a 引っ越す	b 考えにくい	(人)	a/(a+b)
農林漁業・鉱業	2	1	3	0.7
建設業	6	21	27	0.2
製造業	3	8	11	0.3
電気・ガス・熱供給・水道	6	2	8	0.8
情報通信	2	2	4	0.5
運輸・郵便	3	2	5	0.6
卸売・小売	7	24	31	0.2
金融・保険	4	1	5	0.8
不動産・金品売買	2	1	3	0.7
飲食店・宿泊サービス	2	13	15	0.1
生活関連サービス	8	4	12	0.7
専門技術サービス	1	3	4	0.3
その他のサービス	1	7	8	0.1
教育・学習支援	6	4	10	0.6
医療・福祉	20	29	49	0.4
上記に分類されない公務員	42	22	64	0.7
その他	6	4	10	0.6
合計	121	148	269	

(2) 今後の引っ越しについて考えられる理由 (F14.)

「あなたが今後引っ越される場合、次の引っ越しの理由はどのようなものになるとお考えですか」という質問に、「自分の転勤」、「配偶者の転勤」、「子どもの進学」、「住宅の購入や建設」、「自分の親との同居の必要」、「配偶者の親との同居の必要」という選択肢に「その他」を加えたものから選んで回答してもらった（複数回答可）。

表8は、この回答を集計したものである。おいらせ町在住者、むつ市在住者ともにもっとも大きな割合を占める理由は「自分の転勤」である。それ以下の理由の分布は、おいらせ町在住者とむつ市在住者とで比較すると微妙に異なっている。おいらせ町在住者の回答では、そのほかの理由に比べて「住宅の購入・建設」(18.3%)が10ポイントほど上回っている。対してむつ市在住者の回答では「配偶者の転勤」が「住宅の購入・建設」と並ぶ(11.4%)。また、「配偶者の親との同居」を理由として選んだ回答がおいらせ町在住者には多く、「自分の親との同居」を理由として選んだ回答はむつ市在住者に多い。

表8 今後の引っ越しについて考えられる理由

	%	
	おいらせ町	むつ市
自分の転勤	30.2	38.6
配偶者の転勤	8.9	11.4
子どもの進学	5.3	6.5
住宅の購入・建設	18.3	11.4
自分の親との同居	3.6	7.1
配偶者の親との同居	8.9	3.3
その他	24.9	21.7
N	136	156

表9 今後の引っ越しについて考えられる理由：ジェンダーとのクロス集計

	性別	%	
		おいらせ町	むつ市
自分の転勤	男性	50.8	61.6
	女性	27.3	26.1
配偶者の転勤	男性	5.1	3.5
	女性	15.6	26.1
子どもの進学	男性	1.7	5.8
	女性	10.4	10.1
住宅の購入・建設	男性	32.2	15.1
	女性	15.6	11.6
自分の親との同居	男性	5.1	8.1
	女性	3.9	8.7
配偶者の親との同居	男性	3.4	2.3
	女性	16.9	5.8
その他	男性	16.9	11.6
	女性	41.6	42.0
	男性	59	86
N	女性	77	69
	計	136	155

「配偶者の転勤」「自分の親／配偶者の親との同居」という理由の選択に、ジェンダーによる違いはあるだろうか。表9はこれらの項目についてジェンダー別に再集計したものである。男女間で値の差が顕著なのは、2点についてだ。まず「配偶者の転勤」を理由に選択した回答者は、おいらせ町在住でもむつ市在住でも女性の方が男性より明らかに高い割合である。次に、「自分の親との同居」を理由として選択した回答者はおいらせ町在住者とむつ市在住者とのあいだでそれほど差がみられないのに比べれば、「配偶者の親との同居」を理由として選択した回答者については、おいらせ町在住者の場合は女性のほうが男性より高い割合を示しており、おいらせ町在住者の場合は女性が男性よりも20.3ポイント、むつ市在住者の場合は女性が男性よりも8.1ポイント高い値となっている。

(3) おそらく■年後に引っ越し (F12_2)

今後の引っ越しが考えられる場合に、それがおそらく何年後のことと考えられるか。その設問への回答の単純集計が表10である。むつ市在住者、おいらせ町在住者いずれも「3年後」までで有効回答の半数を越え、「7年後」までで7割を越えている。一定年数の内にここまでの割合で引っ越しが予想されているのは、労働者（とその家族）が「転勤」を想定していることによるだろう。

また、「無回答」が一定割合いることも、注目してよいかもしれない。ただし、この質問票では「引っ越しを考えられるかどうか」という質問に対して無回答なのか、引っ越しは考えられるものの、何年後かは分からないゆえに無回答なのかの区別はつかない。

表10 おそらく■年後に引っ越し

むつ				おいらせ			
■年後	人	%	%(累積)	■年後	人	%	%(累積)
1	45	27.1	27.1	1	49	33.8	33.8
2	30	18.1	45.2	2	19	13.1	46.9
3	21	12.7	57.8	3	10	6.9	53.8
4	3	1.8	59.6	4	5	3.4	57.2
5	18	10.8	70.5	5	22	15.2	72.4
6	1	0.6	71.1	6	2	1.4	73.8
7	3	1.8	72.9	7	1	0.7	74.5
8	1	0.6	73.5	10	11	7.6	82.1
10	12	7.2	80.7	14	1	0.7	82.8
13	1	0.6	81.3	15	1	0.7	83.4
20	1	0.6	81.9	18	1	0.7	84.1
25	1	0.6	82.5	20	3	2.1	86.2
30	5	3	85.5	30	2	1.4	87.6
無回答	24	14.5	100	無回答	18	12.4	100
合計	166	100		合計	145	100	

(4) 引っ越し先の予想地 (F13_1、F_13A、F_13B)

この先、引っ越しを考えられる人は、引っ越し先がどこになるのかについてある程度予測はついているのだろうか。国内か海外か、国内ならば都道府県や市町村はどこか、大都市／地方都市／町村部のいずれだと思うか、について回答してもらった。表11-1、表11-2、表11-3はその単純集計である。おおむね国内の転勤が予測されており（表11-1）、国内の引っ越し先予想地としては県内がもっとも回答者の割合が高く、おいらせ町在住者、むつ市在住者ともに東北地方内を予想した回答が75%に達している（表11-2）。ただ、むつ市在住回答者の場合は、北海道転勤を予測している人がおいらせ町在住回答者に比べて多い。また、関東圏では東京都と千葉県、神奈川県が双方ともにやや多くなっている。

表11-1 引越先予想地

おいらせ			
どこへ	人	%	%(累積)
国内	121	83.4	83.4
海外	4	2.8	86.2
無回答	20	13.8	100.0
合計	145	100.0	

むつ			
どこへ	人	%	%(累積)
国内	142	85.5	85.5
海外	1	0.6	86.1
国内国外どちらでも	1	0.6	86.7
無回答	22	13.3	100.0
合計	166	100.0	

表11-2 引っ越し予想先(都道府県)

おいらせ在住者

どこへ	人	%	%(累積)
北海道	3	3.3	3.3
青森県	58	63	66.3
岩手県	2	2.2	68.5
宮城県	8	8.7	77.2
秋田県	1	1.1	78.3
栃木県	1	1.1	79.3
埼玉県	1	1.1	80.4
千葉県	1	1.1	81.5
東京都	8	8.7	90.2
神奈川県	3	3.3	93.5
石川県	2	2.2	95.7
静岡県	1	1.1	96.7
京都府	1	1.1	97.8
山口県	1	1.1	98.9
沖縄県	1	1.1	100
合計	92	100	

むつ在住者

どこへ	人	%	%(累積)
北海道	12	10.3	10.3
青森県	63	54.3	64.7
岩手県	2	1.7	66.4
宮城県	8	6.9	73.3
秋田県	1	0.9	74.1
山形県	1	0.9	75
埼玉県	1	0.9	75.9
千葉県	9	7.8	83.6
東京都	7	6	89.7
神奈川県	4	3.4	93.1
京都府	2	1.7	94.8
大阪府	1	0.9	95.7
広島県	2	1.7	97.4
福岡県	1	0.9	98.3
長崎県	2	1.7	100
合計	116	100	

表11-3 引っ越し予想先(市町村)

おいらせ在住者			むつ在住者		
どこへ	人	%	どこへ	人	%
札幌市	2	2.5	稚内市	1	1.0
ニセコ町	1	1.2	札幌市	4	4.1
青森市	2	2.5	函館市	6	6.1
十和田市	5	6.2	青森市	7	7.1
八戸市	20	24.7	鱒ヶ沢町	1	1.0
六戸町	2	2.5	八戸市	5	5.1
五所川原市	1	1.2	むつ市	31	31.6
五戸町	1	1.2	横浜町	1	1.0
階上町	1	1.2	五戸町	1	1.0
三沢市	3	3.7	三沢市	3	3.1
六ヶ所村	1	1.2	弘前市	6	6.1
おいらせ町	19	23.5	奥州市	1	1.0
三八地方	1	1.2	仙台市	9	9.2
盛岡市	1	1.2	にかほ市	1	1.0
宮古市	1	1.2	山形市	1	1.0
仙台市	8	9.9	所沢市	1	1.0
宇都宮市	1	1.2	習志野市	1	1.0
野田市	1	1.2	柏市	3	3.1
八王子市	1	1.2	松戸市	1	1.0
中央区	1	1.2	館山市	1	1.0
昭島市	1	1.2	市原市	1	1.0
茅ヶ崎市	2	2.5	府中市	1	1.0
小松市	1	1.2	横浜市	3	3.1
浜松市	1	1.2	横須賀市	1	1.0
京都市	1	1.2	舞鶴	2	2.0
防府市	1	1.2	大阪市	1	1.0
那覇市	1	1.2	江田島市	1	1.0
合計	81	100.0	福山市	1	1.0
			佐世保市	2	2.0
			合計	98	100.0

引っ越し先市町村の予想(表11-3)をみると、おいらせ町在住者もむつ市在住者も、自市町内での引っ越しを予想した回答が一定割合を占めることが分かる。おいらせ町在住者の場合は、町内の引っ越し(23.5%)に次いで、日常的な通勤・通学圏でもある八戸市への引っ越し(24.7%)が予想されている。しかし同じく通勤・通学圏であり高校進学先にもなっている三沢市については、回答割合は八戸に比べようもなく低い。八戸市の次に回答割合が高いのは仙台市(9.9%)である。

むつ市在住者の場合は、市内の引っ越し予想回答(31.6%)のほかで目立った回答割合を示している市町村はない。仙台市や函館市、青森市、弘前市といった地方都市が5%~10%のあいだの割合を示している。

(5) 引っ越し先予想：大都市/地方/田舎(F13_2.)

将来に引っ越しが考えられるとしたら、その移動先を具体的な県や市町村ではなく、大都市/地方/田舎(町村部)のどれか、その予想を設問した。その回答の単純集計を示したのが表12-1.である。おいらせ在住者、むつ在住者ともに似たような回答分布傾向であり、6割以上が地方都市への引っ越しを予想しており、次いで町村部(2~3割)、大都市(1割前後)と並ぶ。

表12-1. 引っ越し先予想：大都市/地方/田舎

	%	
どこへ	むつ	おいらせ
大都市	12.8	9.9
地方都市	65.4	62.6
田舎(町村郡)	21.8	27.5
N	78	91

ここで、この引っ越し先の「予想」と、暮らしたい地域の「希望」との関係をみてみたい。本調査では、「あなたの住居に関わる価値観について伺います」という4件法の設問がある（問2. A～C）。このなかで「自分が一生暮らす場所として、下北半島のようにあるような「田舎」はいいと思う」（田舎に定住志向）、「自分が一生暮らす場所として青森市のような「地方都市」はいいと思う」（地方都市定住志向）、「自分が一生暮らす場所として東京のような「大都市」はいいと思う」（大都市定住志向）、という3つの項目についての回答と、このF13_2の引っ越し先「予想」の結果とのクロス集計を試みよう。

表12-2. 暮らしたい地域（希望）

場所	志向の強さ	%	
		おいらせ	むつ
田舎	4 まったくそう	8.7	19.4
	3 どちらかといえばそう	21.7	38.2
	2 どちらかといえばそうではない	41.6	28.7
	1 まったくそうではない	28.0	13.7
地方都市	4 まったくそう	8.1	19.2
	3 どちらかといえばそう	53.6	51.5
	2 どちらかといえばそうではない	27.7	21.9
	1 まったくそうではない	10.5	7.5
大都市	4 まったくそう	3.9	8.1
	3 どちらかといえばそう	16.9	17.9
	2 どちらかといえばそうではない	38.0	38.8
	1 まったくそうではない	41.3	35.2
N		332	335

まず、暮らしたい地域の「希望」についての単純集計の内容を確認しておく。表12-2. は、田舎／地方都市／大都市への定住志向田舎に定住志向（問2. A～C）についての単純集計表である。注目されるのは、地方都市定住志向と大都市定住志向に関しての傾向である。おいらせ町在住者・むつ市在住者ともに、地方都市定住志向には「どちらかといえばそう」を半数以上が選択しており、「まったくそう」も合わせればおいらせ町在住者の6割以上、むつ市在住者の7割以上が地方都市定住志向を示していることが分かる。つまり、おおまかに全体をみれば、将来暮らす地域については「予想」（表12-1.）

も「希望」（表12-2.）も、地方都市志向を選択する回答者は5割～7割程度を占めることになる。また、大都市定住についてはおいらせ町在住者・むつ市在住者ともに否定的な傾向がみえ、「どちらかといえばそうではない」「まったくそうではない」を合わせれば、おいらせ町在住者の8割弱、むつ市在住者の7割以上が否定的な志向を示していることが分かる。つまり「予想」ばかりでなく「希望」についても、大都市志向を選択する回答者は1割～3割程度なのである。一方で、両地域で異なった傾向がみられるのは田舎定住志向についてで、むつ市在住者の方が、おいらせ町在住者に比べて肯定的な回答割合がやや高い。

表12-3. 定住の「希望」と引っ越し先の「予想」その関係：おいらせ在住

a. 「田舎に定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	3	3	4	10
どちらかといえばそう	1	11	4	16
どちらかといえばそうではない	3	23	6	32
まったくそうではない	2	13	3	18
無回答	1	1	0	2
計	10	51	17	78

b. 「地方都市定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	2	6	2	10
どちらかといえばそう	4	27	8	39
どちらかといえばそうではない	2	12	7	21
まったくそうではない	1	5	0	6
無回答	1	1	0	2
計	10	51	17	78

c. 「大都市定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	1	2	0	3
どちらかといえばそう	4	11	1	16
どちらかといえばそうではない	1	21	5	27
まったくそうではない	3	16	11	30
無回答	1	1	0	2
計	10	51	17	78

表12-4. 定住の「希望」と引っ越し先の「予想」その関係：むつ在住

a. 「田舎に定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	0	3	3	6
どちらかといえばそう	1	21	12	34
どちらかといえばそうではない	2	20	6	28
まったくそうではない	6	12	3	21
無回答	0	1	1	2
計	9	57	25	91

b. 「地方都市定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	2	10	3	15
どちらかといえばそう	3	38	14	55
どちらかといえばそうではない	2	5	6	13
まったくそうではない	2	2	1	5
無回答	0	2	1	3
計	9	57	25	91

c. 「大都市定住志向」と今後の引っ越し先予想とのクロス集計（人）

	大都市	地方都市	田舎	計
まったくそう	5	2	1	8
どちらかといえばそう	2	11	3	16
どちらかといえばそうではない	2	26	10	38
まったくそうではない	0	17	10	27
無回答	0	1	1	2
計	9	57	25	91

次に、定住先の「希望」と引っ越し先の「予想」との関係をもう少し詳しくみるために、田舎／地方都市／大都市への定住志向の別に、引っ越し先予想とのクロス集計結果を、おいらせ町在住者とむつ市在住者とのそれぞれについて、表12-3. および表12-4. にまとめた（各度数が小さくなっているので割合では示さずに実数で示す）。たとえば田舎に定住志向で将来の予想移住先が田舎である（「田舎志向-予想移動先田舎」）など、希望移動先と予想移住先が一致する組み合わせを四角い枠で囲み、

実際にクロス集計で人数が多く分布したセル（15人以上）は網がけしてある。すでに表12-1. および表12-2. で確認したとおり、全体の傾向として予想移住先は6割以上が「地方都市」である。「予想」の列をみれば、いずれの表でも人数は地方都市の列に多く分布していることが確認できる。

さて、「希望」と「予想」とが一致する組み合わせ（四角い枠）のセルとクロス集計結果で多くの人数が分布するセル（網がけ部分）とが重なるケースは、おいらせ町在住者においてもむつ市在住者においても希望移動先と予想移動先とがどちらも「地方都市」のところである。地方都市志向について「どちらかといえばそう思う」を選択した回答者のうち、将来の予想移動先も地方都市を選択した人は、おいらせ町在住者（表12-3-b.）では27人、むつ市在住者（表12-4-b.）では38人になっていて、これらがクロス集計表のほかのどの組み合わせ（セル）に比べても上回る人数が分布している。

そのほかの田舎に定住志向、大都市定住志向を選択した回答者においては、「希望」と「予想」とが一致する組み合わせのセル（四角い枠）は、クロス集計結果で多くの人数が分布するセル（網がけ）とはズレたところに位置しており、人数が多く分布しているとは言えない。

田舎定住志向について「どちらかというところではない」「まったくそうではない」と回答した人のうち、おいらせ町在住では（表12-3-a.）50人中36人、むつ市在住では（表12-4-a.）49人中32人の回答者が、将来地方都市に移動するだろう、と予想している。これは、同じカテゴリで将来大都市に移動するだろう、と予想している回答者の人数（おいらせ町在住者5人、むつ市在住者8人）よりもずっと多い。

田舎に定住志向がある（「まったくそう」「どちらかといえばそう」と回答した人は、おいらせ町在住の回答者では26人、むつ市在住の回答者では40人である。これらのなかで、将来の予想移動先を地方都市だろうと回答している人は、おいらせ町在住の回答者14人、むつ市在住の回答者では24人である。これらの人は、どちらかといえば不本意ながら将来地方都市に暮らすことになるだろう、と予想していることになる。

大都市定住志向（「まったくそう」「どちらかといえばそう」）を選択した回答者は、おいらせ町在住の回答者（表12-3-c.）のなかでは19人、むつ市在住の回答者（表12-4-c.）のなかでは24人である。これらのなかで、将来の予想移動先を地方都市だろうと回答している人は、おいらせ町在住の回答者のなかでは13人、むつ市在住の回答者のなかでは13人と、いずれも過半数である。また、大都市定住志向について否定的に回答した（「どちらかといえばそうではない」「まったくそうではない」）人については、おいらせ町在住の回答者57人中37人が、むつ市在住の回答者65人中の43人が将来地方都市に暮らすことになるだろう、と予想している。

地方都市定住志向について「どちらかといえばそうではない」「まったくそうではない」と否定的な回答者については、移住先をどのように希望し予想しているか。おいらせ町在住の回答者の場合（表12-3-b.）は27人、むつ市在住の回答者の場合（表12-4-b.）は18人がこれにあたる。かれらのうち、おいらせ町在住回答者の17人、むつ市在住回答者の13人は地方都市に移住することを予想している。

おいらせ町在住者・むつ市在住者ともに、具体的に引っ越しを想定している回答者が4割以上で、引っ越しを想定している回答者は高学歴者に多い。自分の転勤や夫の転勤での引っ越しという移動理由が多く想定され、将来の大都市への移動については「予想」も「希望」も低く、地方都市への移動について「予想」も「希望」も6割に達する。これらが「引っ越し予想」を通して本節でみてきた概略である。

4-5. まとめ

以上で、おいらせ町とむつ市の在住者の地域移動のうち、特に各市町出身者の高校までの移動と、在住者の将来の移動についての傾向をみてきた。おいらせ町については、周辺市町村との境界をまたいだ移動から八戸都市圏という生活移動圏の実効性をうかがうことができ、むつ市については人口減少地（旧村）を抱えているものの、現住者（回答者）の将来の移動に関しては、おいらせ町・むつ市双方の在住者ともに地方都市への移動の希望と予想の傾向が出ており、その移住予想先の地方都市はほぼ県内ふくむ東北地方内で収まる。このように転勤移動するのは比較的高学歴の労働人口であり、高卒・専門学校卒の労働人口は地域内に定着する、という図式が想定できる。従業種の違いから、むつ市在住者回答者に将来の引っ越しを予想している割合が、おいらせ町在住回答者に比べ大きいこと、今後の引っ越しに関して考えられる理由のうち「配偶者の転勤」「配偶者の親との同居」について、両地域の間ジェンダー差の傾向がみとめられたことが挙げられるが、それ以外には本調査のデータでみる限りは、両地域に顕著なちがいはないように思われる。